

## ゲルチーノ《受胎告知》とエスコラピオス修道会

おおつか ゆみ  
大塚 優美 (神戸大学)発表  
要  
旨13  
時  
30  
分  
|  
14  
時  
10  
分松  
ヶ  
崎  
・  
東  
キ  
ャ  
ン  
パ  
ス  
内  
60  
周  
年  
記  
念  
館  
1F  
記  
念  
ホ  
ール

17世紀ポローニャ派の画家ジョヴァンニ・フランチェスコ・バルビエーリ、通称ゲルチーノ(1591-1666)による《受胎告知》(1646年)は、北イタリアの一都市ピエーヴェ・ディ・チェントにあった受胎告知聖堂の主祭壇画として制作された。本作は、画家の晩年作の中でも特に優れた作品として知られるが、図像伝統から逸脱する特異なものとも評される。本作と図像をほぼ同じくする後継作《受胎告知》(1648年、フォルリ市美術館)が、非常に高値で注文されたことは、周辺地域での本作の成功を端的に示す。しかしこれ以降他の画家はおろか、ゲルチーノ自身によっても類似の表現は用いられなかった。以上より本作は、17世紀エミリア・ロマーニャ地方周辺という、限定された時と場における絵画需要や、信仰の具体相を示すものとして検討される必要がある。

先行研究では本作の図像について、注文主マステラリのカトリック改革思想に基づく教育的欲求を表すため、画家が新しく考案したと推察されるにとどまっている(Di Natale 2012; Turner 2017)。本発表では、図像との関係において看過されてきたエスコラピオス修道会の活動に着目し、制作意図と図像の関連を考察する。

第一に、注文主と修道会創設者カラサンス間で交わされた書簡などを用いて、同都市における本修道会の役割を検討する。貧しい子どもへの無償教育を主眼とする本修道会は、マステラリの主導する教育施設設立案の協力者として誘致された。注文主はこの誘致に際して、彼らの教育活動の場として受胎告知聖堂を新設し、その装飾のため本作を注文したことが確認できる。この事実から本図像には、注文主のみならず修道会の思想も反映された可能性を挙げる。

第二に、同主題作例との比較を通じ、特異とされてきた本図像の独創性を改めて明確にする。そして、画面上部に「マリアを訪れるよう指示する父なる神とそれを聴く大天使」、下部に「読書に没頭するマリア」をほぼ縦一列に並べて描く点をその特徴として示す。この表現から本作では、受胎告知というよりも、神によるマリアの選択そのものが強調されていることを指摘する。

第三に、上記の独創性と教育との関連を検討する。同時代の教育活動の中でも本修道会の教育の特色が「読むことの重視」にあることを示し、それが本作において「読書」図像が選択された理由に他ならないことを指摘する。またトレント公会議以降、カトリック側が提示した恩恵理解に鑑みれば、上述の教育的欲求や勉学に励むことは、救いにつながる善行に含まれる。このため本作の「神が読書に没頭するマリアを選ぶ」描写は、神の救済にふさわしいたゆまぬ徳の実践の必要性を表し、マリアをそうした理想的信仰者として称揚するものといえる。

以上から本作は、マリアを模範として、特に読書による学習・教育に励むよう、子どもや修道会士に対して推奨する意図の下に制作されたと結論付ける。